

「アルレキンのお客様」 フェスティバル日刊新聞 “People&Puppet”

2017年9月25日号

4頁上段

「ひとの心の善と悪」

人形劇団ポポロ演じる「鬼ひめ哀話」は、原作者さねとうあきらの哲学と日本の伝統演劇を融合させた作品である。今日、劇団は日本国内でも良く知られる作者追悼の意を込めて本作品を演じている。

修正不可能なほど恐ろしい過ちを犯してしまっても、人間は希望をなくしてはならない。罪を犯せば、永遠の苦しみが待ち受けている。懲罰で正當にひとをさばくことは出来ない。殺人者に復讐しその命を奪うことは、苦しみを負わせるだけでさらに悪を増幅させることになる。報復の権利は誰にもなく、罪の贖いは運命づけられている。二人の親切な老人を殺し、鬼となった桜姫の物語の根底にあるのはこのような哲学だった。自分の犯した罪により、彼女は雪深い山の中で永遠に苦しむ。灰色の毛から突き出た2本の角を櫛で漉く日々。それは、寒さと飢えを癒すため、家に招き入れてくれた老人二人を殺した桜姫への報いだ。妻にすると行ってくれた都の麻呂との幸せも叶わなかった。恐ろしい姿に変貌して尚も彼のことを忘れようとはしない。魂が破滅の運命にあっても希望を捨ててはならない。

シリアスなテーマであるにも関わらず、本演目は12歳からを対象としている。「子供たちとは真剣に向き合い話さなければならない。そして両親との対話が必要です」と劇団員は語った。

物語の登場人物たちは日本の民話を元としているが、人形劇団ポポロは日本以外での公演は行っていない。彼らは最近亡くなった原作者さねとうあきら氏の追悼の意を込めて「鬼ひめ哀話」公演を行うためにシベリアにやってきた。日本では経済的理由もあり（自らの劇場を所有していない劇団にとって、上演にかかる費用は少なくない出費であるため）本作品の上演回数は少ない。であるからこそ、日本の客人たちにとってオムスクのフェスティバルでの歓待と観客席からの反応を受けた感謝の気持ちは大きかった。

大見出し:「世界規模」

「アルレキンのお客様」フェスの最初の受賞者が発表された。

オムスクでは9月22日より始まった第5回国際人形劇祭「アルレキンのお客様」が続いている。今日にも最後のコンクール演目が公演され、夜にはコンクール受章者が発表される閉会式が行われる予定だ。そして、誰に最初の賞が贈られるかはすでに判明している。

本フェスティバルはロシアの大規模文化イベントのひとつとしてあげられる。オムスク市民に向けて、6日間で14カ国19劇場の公演が行われた。「地理的には日本からブラジルまで、今日「オムスクのお客様」は世界規模となった。すべての演目が独創的である」と、演劇祭実行委員長スタニスラフ・ドゥブコフ氏は語った。「世界の様々な人形劇でポスターが彩られるよう、申込み54に対し、18の公演を選びました」

「それぞれが全く違う演目でありどうやって審査員は受賞者を選考するか、考えるだけで大変です。北京の影絵劇団による印象深く規模も大きく細部にわたって技術的に洗練された「ムーラン物語」、リュブリャナ人形劇場の絵画を使った魅力的な室内劇「チュリュトウトウ」。あるいは、グロドゥノ州人形劇場の古典劇「デーモン」、フランスの劇団タラバットによる紙芝居劇「人形芝居の原点 Guignol から始めよう」など。恐らく審査会は長時間にわたると思います。

議論なしで指名される唯一の賞は「世界の人形劇発展に寄与した特別賞」ですすでに受賞者は決定しており、ゴールデンマスク賞を幾度となく受賞し世界中で人形劇を創造してきた演出家エヴゲーニー・イブラギモフ氏です。その他のトロフィーが誰に渡るのかは今晚分かるでしょう。今はまだエキゾチックなフェス参加作品の数々を思い起こすに留めましょう」

「日本スタイルの罪と罰」

東京の人形劇団ポポロがフェスティバルの観衆に見せたのは正しくスリラーだった。さねとうあきら原作「ゆきこんこん物語」を基とした「鬼ひめ哀話」だ。

傲慢な姫が二人の老人を殺害する血みどろの犯罪を起こす。その罰はすぐにやってくる。何年にも渡り山の中では姫のとぎれとぎれの泣き声が聞こえてくる。彼女は角が無くなるよう徒勞の希望を抱きつついくどもいくども髪を漉く。ロシア的観点から見れば、これはまったく子供劇ではないが、日本は正しい。劇団ポポロは本作品を家族で観て、それについて話し合うことを勧めている。

「文明が行き届かなかった北海道などでは罪人を処刑しない村がある」と劇団代表の山

根宏章氏は語った。償いは死の後にある。処刑されても尚、魂には償いが必要であり、自分が犯した罪と罪人を罰した二重の重荷があるからだ。あらゆるひとが、そのひとが罪を犯しても犯さなくても、幸せを求める権利がある。そのような哲学に作家さねとうあきらの気持ちが汲み上げられている。

(後半省略)

※ 後半の内容は、見たことない劇団（ソフィア、ブルガリア）、「宝島」劇団 O que de que（サンパウロ、ブラジル）について。

記事 タチアナ・ポポヴァ

写真 ウラジーミル・カジオノフ（フェス写真家）

和訳 田代紀子

サイト記事：<http://omskgazeta.ru/kultura/prestuplenie-i-nakazanie-v-yaponskom-stile>

● その他マスメディア

「山根宏章ーオムスクで私たちはまるでポップスターのように拍手喝さいを浴びた」<http://mc.bk55.ru/news/article/14776/#comm>

「日本人がオムスク市民に見せてくれたのは二人の殺人と夢への希求を描いた民話だった」
<http://mc.bk55.ru/news/article/14765/>

「姫と鬼ひめ。日本人が人形劇祭で見せた芝居」<http://russiajapansociety.ru/?p=1154>

「オムスクのアレキンの舞台で日本の劇団が鬼に変身する姫の芝居を演じた」
<https://www.om1.ru/afisha/news/121849/>

「日本の人形遣いが姫を鬼に変身させた」（オムスク州テレビ放送、動画です。山根さんのインタビューあり）<http://gtrk-omsk.ru/news/242145/>

スポーツニクの記事

<https://jp.sputniknews.com/culture/201710054150450/>